

Pinyo

動臨研 野生動物ニュースレター Vol.45



Contents

- ▶ 男鹿水族館 GAO の「推し」生物 大野 晃 治
- ▶ セキレイの子育て ～のぼるくんの観察日記～ 入江美由紀
- ▶ 野生鳥獣保護管理基金へのご協力のお願い
- ▶ 表紙の動物のご紹介
- ▶ 編集部だより

男鹿水族館 GAO の「押し」生物

男鹿水族館 GAO 獣医師 大野晃治



野生どうぶつ友の会ニュースレター『Pinyo』を読んでいる皆様、こんにちは。秋田県にある男鹿水族館 GAO で獣医師として働いている大野と申します。私は、2007 年 4 月から 2012 年 3 月まで、公益財団法人動物臨床医学研究所に勤務していました。実は、そのときに数年間、Pinyo の編集にも関わっていたことがあります。10 年以上の時を経て、また Pinyo の紙面に戻ってくることができ、感慨深く感じています。

男鹿水族館 GAO は、秋田県の男鹿半島の先端にある水族館で、秋田県の海に生息する魚類を中心に様々な生物を飼育展示しています。今回は、男鹿水族館 GAO の一押し生物を 2 種類ご紹介したいと思います。1 種類目は秋田県の県魚ハタハタ(写真 1)、そして 2 種類目は水族館としては珍しい生物であるホッキョクグマです(写真 2)。



写真 1 ハタハタ

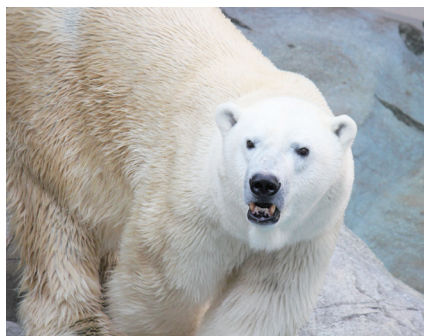


写真 2 ホッキョクグマ

ハタハタは千島列島～北海道沿岸、本州では青森県～山口県までの日本海沿岸の深海に生息する魚です。日本海には主な産卵場が 2 つありますが、そのうちの 1 つが秋田県です。男鹿半島は昔からハタハタの一大産卵場として知られ、12 月初旬に産卵のために沿岸に大群で押し寄せるハタハタは、季節ハタハタと呼ばれ男鹿の食文化を支えてきました。秋田県にとって重要な魚種で、男鹿水族館 GAO でも 2004 年の開館以来、ハタハタの飼育展示に力を注いでいます。ちなみに鳥取県でもハタハタが漁獲されていますが、こちらは産卵期ではなく深い海を回遊している時期に獲れたものです。秋田県で獲れるハタハタは繁殖期特有の淡泊な味であるのに対して、鳥取県のハタハタは脂ののった味で、地域によって違った味が楽しめます。

ハタハタは飼育が難しく、一年を通して飼育展示している水族館はあまり多くありません。ハタハタにはウロコがなく傷に弱いため、採集したハタハタは長く飼育することができないのです。男鹿水族館 GAO では、一年中ハタハタの飼育展示を行っていますが、これは、水族館内でふ化させることで実現しています。毎年の漁の時期に、生殖腺の発達したオス・メスを入手し、水族館内で人工授精を行い、ふ化させています(写真 3)。こうして生まれたハタハタは、初めから水族館という環境に慣れているため、飼育によるストレスが少なく長生きしてくれるというわけです。

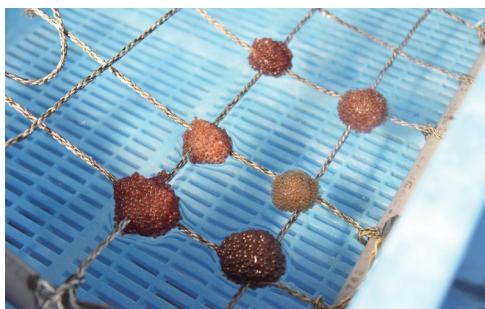


写真3 人工授精を行ったハタハタの卵

ところで、魚も私たちと同様、様々な病気になりますが、最も多いのは寄生虫や細菌などの感染症です。本来の海の環境と比べて、水槽内ではどうしても飼育密度が過密になったり、水の汚れも多くなったりしてしまうため、住む魚に負担がかかります。そうして抵抗力が落ちたり、病原体が増えたりしたことで、感染症を発症しやすくなるのです。調子が悪い魚がいた場合、まず体表の粘液や鰓の検査を行い、病原体の有無を顕微鏡でチェックします（写真4）。病原体が見られた場合は治療を行います。魚を対象とした抗菌薬や抗寄生虫薬などが水産用医薬品として販売されていますので、そのような薬を餌に混ぜて投薬治療を行います。同時に、感染症が発生した根本原因があるはずなので、水温や水質、飼育環境、給餌内容などを飼育担当者とともにチェックしながら、飼育環境の改善をはかり、治療効果の増強と再発防止を行っていきます。このようにして、いつも健康な魚を皆様にお見せできるよう、日々取り組んでいます。



写真4 麻酔をかけて検査をしているところ

さて、ハタハタの話に戻りますが、実は野生でのハタハタの状況は非常に厳しいものがあります。秋田県のハタハタは、1960年代には年間2万トンも漁獲されていましたが、近年は数百トンほどで推移しており、昨年はなんと17トンしか漁獲されませ

んでした。これは過去最低の数値です。水族館でも、毎年ふ化したハタハタの一部を海へ戻す取り組みを行っていましたが、ここ数年は人工授精用の親魚の確保も難しくなりつつあります。これからも私たちの食卓でハタハタの味が楽しめるのか、岐路に立っています。

次に、男鹿水族館 GAO の一番の「推し」であるホッキョクグマについてお話ししたいと思います。ホッキョクグマは陸上最大の肉食哺乳類で、オスでは体重 300 ～ 450kg、メスでも体重 200 ～ 300kg ほどあります。野生では、IUCN（国際自然保護連合）レッドリストの VU（危急種）に指定されており、すぐに絶滅の可能性が高いわけではありませんが、今後の気候変動を考えると危機的な状況となることが想定されています。ホッキョクグマの学名は *Ursus martimus* です。*Ursus* はクマ、*maritimus* は海、つまり「海のクマ」という意味の学名です。なぜ海のクマなのかというと、その生活が海に依存しているからです。ホッキョクグマの野生での主食はアザラシですが、水中を泳いでアザラシを捕まえるわけではありません（アザラシの方が速いので捕まりません）。秋から春にかけて、ホッキョクグマが生息する北極圏は海一面が凍ります。そのとき、アザラシは休息のために氷の上に上陸したり、海面の氷の隙間から呼吸をしたりします。その瞬間をホッキョクグマは仕留めるのです。つまり、ホッキョクグマは海水がないと餌を食べることができません。今後 100 年間で、北極圏の海水は大幅に減少することが想定されており、海水がなくなった場所ではホッキョクグマは生きていくことができなくなります。

野生での状況と同様、飼育下のホッキョクグマの現状も厳しいものがあります。2023 年末時点で、国内で飼育されているホッキョクグマは 19 施設 31 頭でした。1995 年の 33 施設 67 頭をピークに右肩下がりで減少しています。そのため、国内の動物園・水族館が協力して、個体を積極的に移動させてペアリングを促すなどの取り組みを行い、ホッキョクグマの繁殖に取り組んでいます。

男鹿水族館 GAO は 2004 年 7 月 13 日に、旧男鹿水族館からリニューアルオープンしましたが、そのリニューアルの目玉がホッキョクグマでした。ところが、開館当初はホッキョクグマがいませんでした。海外からホッキョクグマを入れる予定だったのです

が、当時の飼育施設として予定していた場所が狭く、海外の動物園がなかなかホッキョクグマを出すことを許可してくれなかったのです。そこで、建物に隣接して広い展示場を増築することで、なんとか海外のホッキョクグマ飼育基準を満たし、ホッキョクグマを海外から入れることができたのです。けがの功名で、ホッキョクグマ展示場としては国内有数の広さを持つ飼育施設ができたことで、今では国内のホッキョクグマ繁殖を担う施設の1つとなり、これまでに3頭のメスを受け入れてペアリングを行い、2頭の子供が誕生しています。

ここでホッキョクグマの繁殖生態についてお話しします。ホッキョクグマは春に繁殖シーズンを迎えます。普段は単独行動をしているホッキョクグマですが、春になるとオスがメスを探し回ります。オスとメスが出会うと、最初は険悪なムードですが、数日～2週間ほどかけて徐々に仲良くなっていき、交尾に至ります。その後はメスがオスを拒絶するようになり、2頭は離れていきます。交尾が成立すると受精卵が誕生しますが、すぐには着床せず、夏の間は休眠し、秋頃になって着床します（これを着床遅延といいます）。着床後、数カ月かけてお腹の中で赤ちゃんが育ち、冬に巣穴の中で出産します。

ホッキョクグマの妊娠診断は難しく、外見からは妊娠の有無がはっきり分かりません。ホッキョクグマの赤ちゃんの体重は、誕生時に約600gしかなく、出産前には300kg以上の体重になるお母さんと比べるととても小さいです。そのため、お母さんのお腹がパンと張るようなことはありません。もちろん超音波検査をすれば分かりますが、麻酔をかけないといけないため、胎児へのリスクを考えると現実的には困難です（写真5）。



写真5 麻酔下でオスの健康診断を行っている様子。麻酔下であれば超音波検査も可能。

現在、妊娠診断として一般的に行われているのは性ホルモン検査です。特に、採取が簡単な糞便を用いた検査が多く行われています。1週間に数回、展示場に落ちている糞便を採取して、性ホルモンの推移を調べることで妊娠の有無を検討します。しかし、妊娠していなくても糞便中のホルモンが妊娠したかのような動きを示すことも知られており（偽妊娠といいます）、確定的な方法とまではいえません。最近では、ハズバンダリートレーニングを利用して、麻酔を使わずに採血を行う例が増えており、妊娠個体での血中性ホルモン値のデータも蓄積されてきました（写真6）。今後は、血液を用いた精度の高い妊娠診断が可能になっていくかもしれません。



写真6 トレーニング下でホッキョクグマの手から採血を行っているところ。ご褒美としてオイルを与えながら採血する。

男鹿水族館 GAO のホッキョクグマは、今年の春に交尾がみられました。妊娠しているかどうかは分かりませんが、出産シーズンの冬に「ホッキョクグマ誕生」という嬉しいご報告ができるよう、しっかりと準備を整えていきたいと思います。

今回、男鹿水族館 GAO で力を入れて飼育展示を行っている、ハタハタとホッキョクグマという2種類の生物を紹介しました。片や深海に生息する1kgにも満たない魚と、片や400kgを超える陸上最大の肉食獣です。いずれも、男鹿水族館 GAO を象徴する生物ですが、野生での見通しは必ずしも明るいものではなく、飼育展示についても今後いつまで続けられるか不安も感じています。その中で、少しでも長く皆様に生き生きとした生き物たちをお見せできるよう精一杯取り組んでいきたいと思います。

セキレイの子育て ～のぼるくんの観察日記～

米子動物医療センター 愛玩動物看護師 入江美由紀



セキレイはスズメ目スズメ亜目セキレイ科の鳥でとても身近な鳥のひとつです。一年中日本で過ごす留鳥で、市街地でもよく見かけます。今回は私の家族から聞いたセキレイの話をお伝えします。

一年前から毎日学校へ通うのぼるくんはある日、建物の中から鳥が飛び出していくのを見かけました。一緒にいた仲間たちも「なんか今、鳥がおったぞ」と話しながら通り過ぎて行きます。鳥は少し離れたところからこちらを見えています。2羽います。のぼるくんは考えました。

あれはセキレイかな？2羽いるからつがいかな？もしかしたら巣があるかも。

仲間に気づかれないように鳥が出てきたところを探します。

あった！

それはすぐに見つかりました。人の目線より少し下、建物の壁とステンレスの隙間に作られた鳥の巣です。中には小さな卵が5つあります。親鳥の鳴く声が大きくなり、急いで写真を撮ってその場を離れました。

みんなに知られたら騒ぎになって親鳥が戻らなくなるかもしれない。もしかしたら巣が壊されてしまうかも。

そう考え、これは自分だけの秘密にしようと決めました。

6/10 セキレイの卵発見。この日からのぼるくんのセキレイ観察が始まりました（写真1）。



写真1

6/19 ヒナ誕生。卵発見から9日目。待ちに待ったヒナが生まれていました。羽の生えていない丸裸の赤ちゃんです。のぼるくんはとても嬉しくて誰かに話したかったのですが、学校では我慢。帰ってから家族に打ち明けたのでした（写真2）。

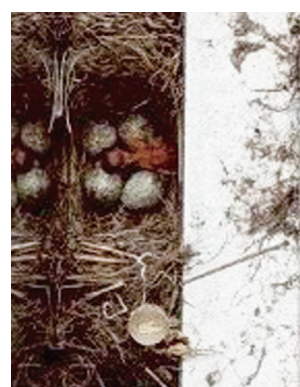


写真2

この日から1～2日で次々にヒナが誕生し、全部で4つの卵が孵りました。残念ながら1つは孵らなかったようです。親鳥たちはひっきりなしに巣から出入りします。交互に飛び立っていった口に何かを咥えて戻り、ヒナたちに与えてまたす

ぐに飛び立つ、の繰り返しです。食欲旺盛な4羽の赤ちゃんの最速は止まりません。

6/23 だいぶ羽が生えそろってきました。まだヒナ特有のホワホワな羽です。この頃のぼるくんはとうとう仲間数人に巣のことをおしえました。やはりちょっとした騒ぎになり、セキレイたちに申し訳なく思うのでした（写真3）。



写真3

親鳥たちが戻らなかったらどうしよう、ヒナたち大丈夫かな、と心配になりましたが、それからセキレイたちはかわらず子育てを続けてくれました。

6/30 ホワホワな羽も少なくなり、身体もかなり大きくなりました。特にはじめに孵ったヒナは他の子より大きく、この日はほんの少し巣の外に出る姿が見られました。巣立ちの練習が始まっているようです（写真4）。



写真4

7/1 大きいヒナの姿が見えません。他の子たちも巣の外に出始めました。親鳥たちの真似をして羽ばたいたり、餌を捕ったり、外で生活していくための訓練をします（写真5）。



写真5

7/3 ヒナ誕生から14日目。誰もいなくなりました。みんな無事巣立っていったかな、のぼるくんは嬉しいような寂しいような気持ちでからっぽの巣を眺め、最後の写真を撮りました（写真6）。



写真6

私の父は孫たちから名前と呼ばれています。この話をとても楽しそうに写真を見せながら話してくれました。ただ、巣がある詳細な場所についてはいまだに教えてくれません。来年も来るかな、と楽しみにしているようです。

日本に住むセキレイでよく見られるものにはキセキレイ、セグロセキレイ、ハクセキレイの3種類がいます。今回のヒナは眉斑がうっすら見え、頬も白っぽいので、おそらくハクセキレイかと思われます。ハクセキレイはセグロセキレイに比べて順応性が高く、人工物でも営巣することが知られています。コンビニの駐車場やガソリンスタンドなどで足元を歩き回る姿をみかけることも多いです。巣が見つかることも珍しくないかもしれません。今回のセキレイは上手に巣を作り、子育て中に親鳥が帰って来られなくなることもなく、巣立ちもうまくいって本当によかったです。もし父が巣から落ちたヒナを拾って帰っていたら大変でした。親鳥にとってそれは誘拐です。人間は親鳥のように虫の捕り方を教えてあげられないし、うまく飛ぶこと、天敵から逃げることも、なども教えてあげられません。野鳥を保護し、飼育するには行政の許可も必要です。

父には今後もし落ちていたヒナを見つけても素手で触らずにそっと巣へ戻す、巣に戻せないなら箱に入れて巣の近くに置いておく、など誘拐犯にならないよう念のため話をしておきました。

来年も今年と同じようにセキレイが子育てできたらいいな、と思います。父が道端で拾った亀を助手席に乗せて池までドライブした話はまたいつか。

のぼるくん 77 歳、もうすぐ夏休みです (写真 7)。



写真 7 愛用のチンパンジーマスクは、まりちゃん（母です）からのプレゼント

2025 年 2 月 1 日から 2025 年 7 月 31 日までに野生鳥獣保護管理基金にお寄せいただきました総額は、68,000 円でした。ご協力頂きました皆様に心よりお礼申し上げます。



野生鳥獣保護管理基金に御協力お願い致します

近年、人間活動が野生動物の領域にまで広がる一方で、里山の崩壊や気候変動、在来種の増加など、人と野生動物において様々な問題が生じています。

野生どうぶつ友の会は、絶滅危惧種を含む疾病野生動物を再び野生に戻す活動を通じて、命の大切さや動物愛護思想の普及を図っております。

当方の活動は、まだまだ微力ではございますが、長期にわたり続けて参ります。今後とも、御理解御協力を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。

<基金送付先>

郵便振込：口座番号 01430-6-14893

口座名：公益財団法人動物臨床医学研究所 野生鳥獣保護管理基金



《表紙の動物》スズメ

表紙の写真は親鳥がヒナに餌をあげる瞬間をとらえた写真です。「スズメの習性を理解して、狙って撮った」と言えばカッコいいのですが、実際はたまたま撮れたものです。500mmの望遠レンズがあるので、たまには使おうかと思い持ち出したものです。鳥を撮る人からしたら開放F値の暗いズームレンズですが…。ファインダー越しにはスズメがいるのは分かっていたのですが、餌をあげる瞬間だったとは撮影しているときには全然気づきませんでした。今の性能のいいカメラのファインダーだったら、見えていたかもしれないですが(笑)。ですが、pinyoの表紙を飾ることができたので、結果オーライと思っています。

さて、スズメという日本では、「舌切り雀」や「雀孝行」などの昔話があり、親孝行や欲張りへの戒め、誠実さへの報いなど、日本人の価値観が色濃く反映されているようです。海外のスズメに関する話では、農作物をついばむいたずら者として描かれていたり、勤勉な鳥として登場したり、幸運を運ぶ鳥として出てくるともあるようです。どの話でも、スズメは人間の生活の近くでよく見かける、身近な鳥であることに由来すると思われるます。

その身近な鳥と思っているスズメですが、生息数が減少している可能性があることはご存じでしょうか? 「モニタリングサイト1000」という環境省と生物多様性センターが行っている動植物の観測数に関

する長期調査の報告(2005-2022年度とりまとめ報告書)では、農地や里山の鳥が2015年以前までと比べて、2015年以降は減少率が悪化しています。スズメはこの報告の中では農地の鳥の中に含まれているようですが、農地の鳥の2015年以降の減少率は-7.4%です。この減少率だけを見た場合には、環境省のレッドリストの絶滅危惧IB類(EN)に相当する減少率です。スズメの絶対数自体は今すぐ絶滅が危惧されるレベルではないと思います。しかし、今のペースで減少した場合、気が付いた時にはスズメを街で見かけなくなっているかもしれません。

また、この報告には、「農地の鳥類は、急激な気温上昇が始まった2015年以降において、急速に記録個体数が減少していることが明らかとなった」とも記載されていて、地球温暖化と鳥類の減少の関連性を指摘しています。

この報告は2022年度までのものですので、そこから更に数年経過した現在、スズメの状況はどうなっているのでしょうか? 年々、夏の暑さが激しくなっているのを肌身で感じています。10年後もスズメのほほえましい写真が撮れること、ありふれた鳥であることを願っています。

公益財団法人 動物臨床医学研究所
獣医師 水谷雄一郎

編集部だより

大野先生に、寄稿をしていただきました。文章中にもありましたが、当財団の元職員で、男鹿(おが)水族館で働かれています。ハタハタは、鳥取では雄しか流通していませんが、秋田に行くと雌のハタハタを食べることができます。鳥取産のハタハタも脂がのっておいおいですが、秋田産もとてもおいしいですね。漁獲量の減少は以前もあり、それを受けて秋田県では1992年から3年間、ハタハタの全面禁漁を行い、資源の回復につなげたことがあります。これだけ漁獲量が下がれば、また禁漁になるかもしれませんね。

ハズバンダリートレーニングの話も出てきました。この手法により、動物は自発的に手などを差し出し処置を行うことができるようになりますので、動物に負担をかけずに、継続的な健康管理や診断治療を安全に行うことができます。パンダやゾウ、イルカなどにも取り入れられており、採血はもちろん体温を測ったり、投薬をしたり、爪切り、歯磨きなども行います。一方で、診察をしていると大暴れする犬や猫も少なくないですね。いかに毎日の訓練が重要であるかがわかります。

愛玩動物看護師の入江さんには、お父様の体験談をご紹介いただきました。写真を見ると、ヒナが縦に並ばないといけなような狭いところに営巣していました。巣を見つけられ、無事巣立つまで、ワクワクの2週間だったと思います。セキレイは同じ場所で営巣する傾向があるので、親鳥が安全だと思えば、次回もそこで子育てをしたいと思います。これからも野生動物が生きるさまを見守っていただければと思います。皆様ありがとうございました。

公益財団法人 動物臨床医学研究所
副理事長(常務理事・所長) 高島一昭

公益財団法人 動物臨床医学研究所 野生どうぶつ友の会
〒682-0025 鳥取県倉吉市八屋 214-10
Tel 0858-26-0851 / Fax 0858-26-2158
E-mail dorinken@apionet.or.jp
URL <https://dourinken.com>
<https://d-wildlife.jp/jpn/org/>

ニュースレター「Pinyo」Vol.45 (2025年8月)
発行: 公益財団法人 動物臨床医学研究所 野生どうぶつ友の会